

# 道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和4年度 第1号 2022年9月30日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

## 令和4年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（1次調査）結果

函館水試試験調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2022年8月30～9月10日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深100～500mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を上回った。
- ・ 魚群反応の強い海域は、恵山沖及び登別～白老沖。
- ・ 魚群反応の強い深度は、水深250m付近（主に渡島沖）及び水深450m付近（主に胆振・日高沖）。
- ・ トロールにより漁獲されたスケトウダラのサイズは、尾叉長40～45cmの成魚が主体であった。
- ・ 水温は、渡島沖（南茅部沖）では水深100～300mにかけて、胆振沖（登別沖）では水深150～250mにかけて平年よりも高かった。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも渡島沖の193・203漁区（恵山沖）及び胆振海域の182・184漁区（登別～白老沖）に比較的強い魚群反応がありました（図1・2）。
2. 渡島から胆振にかけての平均反応量は、前年同期を約80%上回り、2009～2011年度と同程度の値となりました（図3）。
3. 魚群反応は、主に水深150m以深に観察されました。その中でも水深250m付近（渡島沖）と水深450m付近（主に胆振・日高沖）に比較的強い反応がみられました（図2・4）。なお、渡島～胆振沖の水深150～200m付近には海底から離れて中層に浮いている反応がみられましたが、この水深帯の水温から判断するとスケトウダラ成魚の反応ではないものと考えられます。
4. トロール調査を渡島沖及び胆振沖の水深300～400mで実施した結果、採集されたスケトウダラは両地点とも尾叉長40～45cm前後の成魚が主体となっていました（図5；トロール地点は図1右上図参照）。
5. 調査海域の水温は、南茅部沖（D線沖の観測点）では水深100～300mにかけて1～4℃、登別沖（H線沖の観測点）では水深150～250mにかけて1℃前後、平年（2002年度以降の平均値）よりも高くなっていました。また、スケトウダラ成魚の生息に好適とされる5℃以下の水温は、両地点ともおよそ水深250m以深となっていました（図6；水温観測地点は図1右上図参照）。

なお、今回の資源調査の結果は、漁期始め（10～11月）の状態を予測するために実施しているものです。12月以降の状況は、11月下旬に実施する分布調査（2次調査）により予測する予定です。調査終了後にスケトウダラニュースを発行して、来遊状況等をお知らせします。

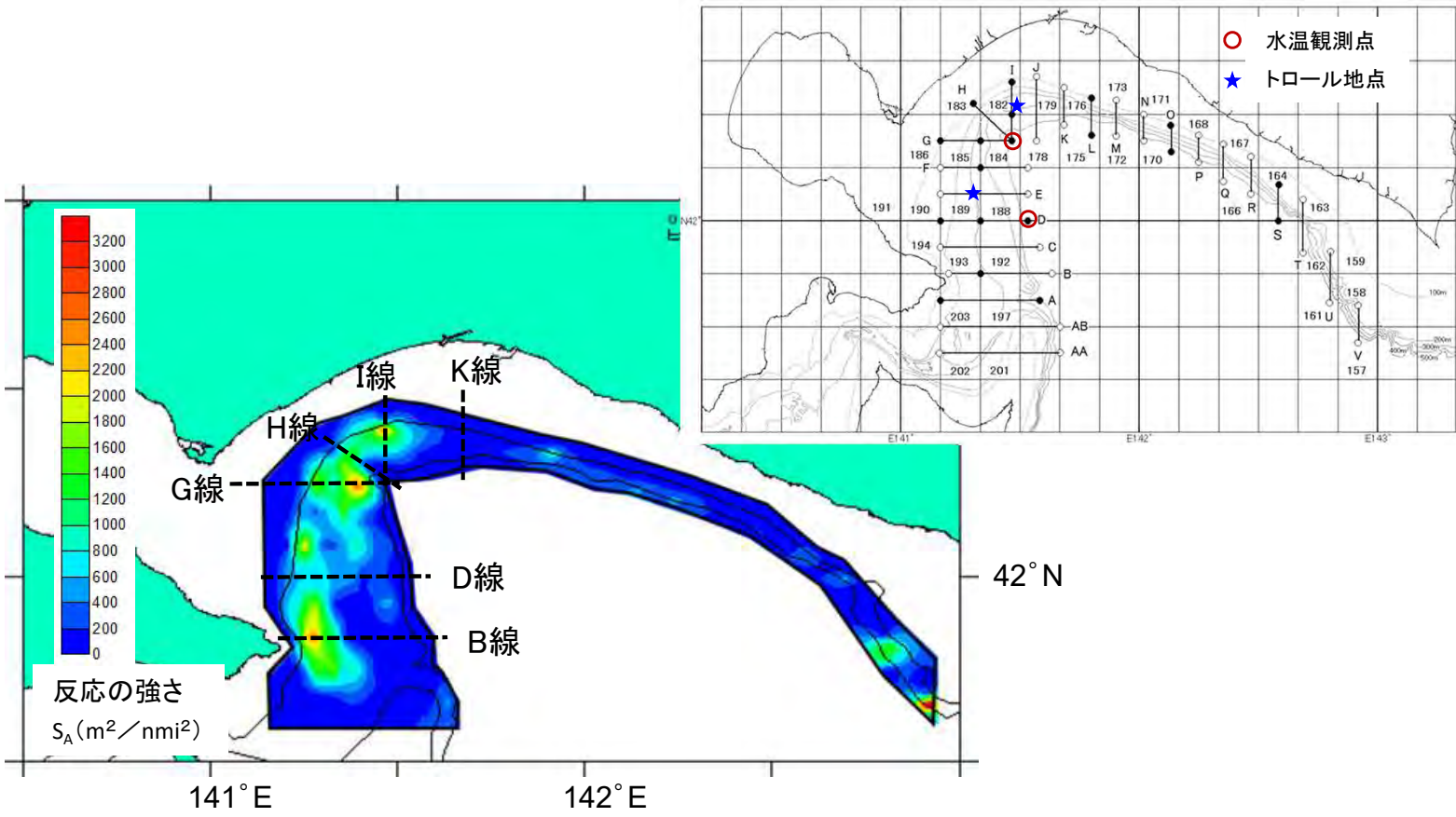


図1 調査海域における魚群の分布(右上図は調査海域図)

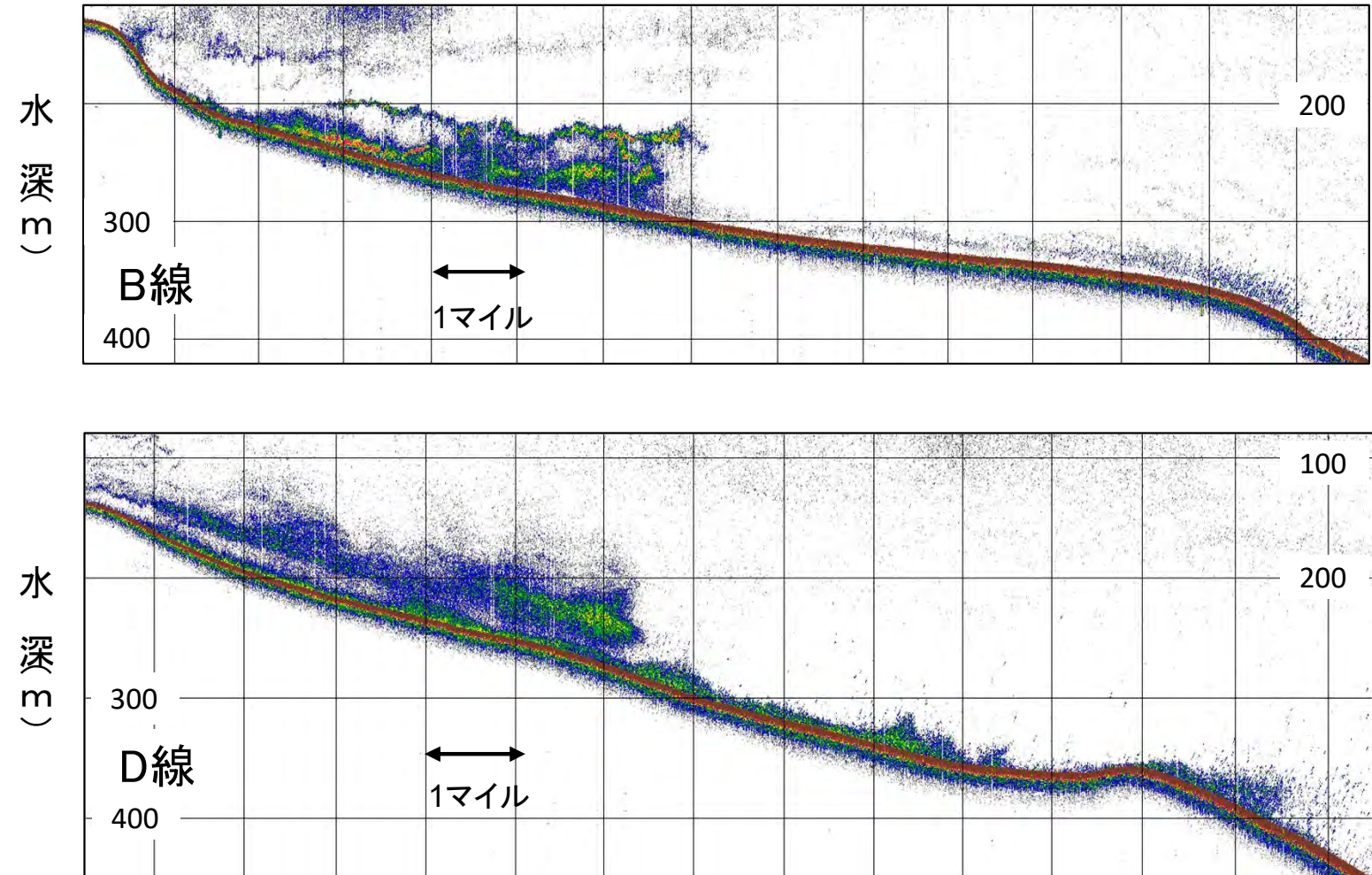


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

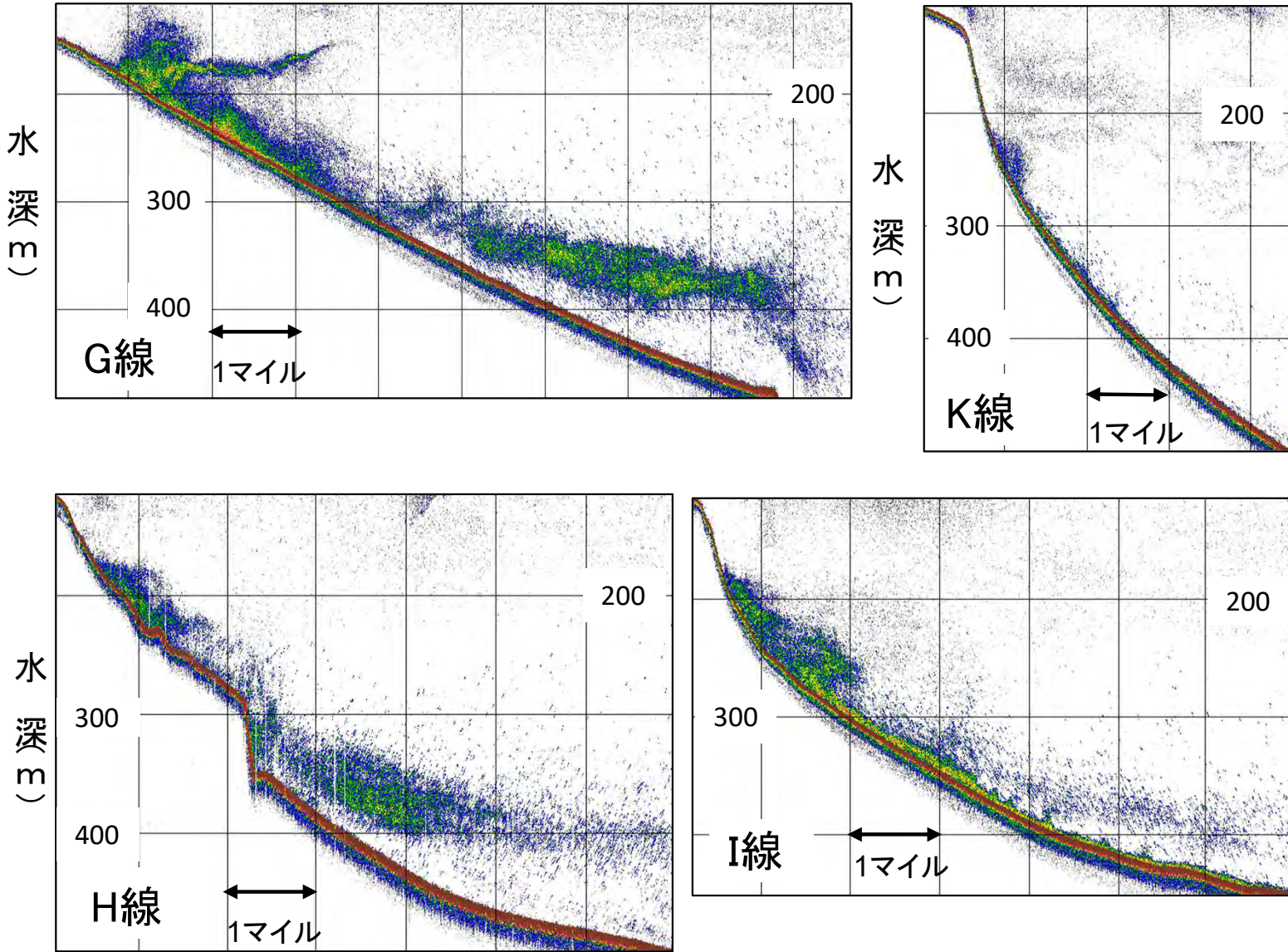


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき  
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

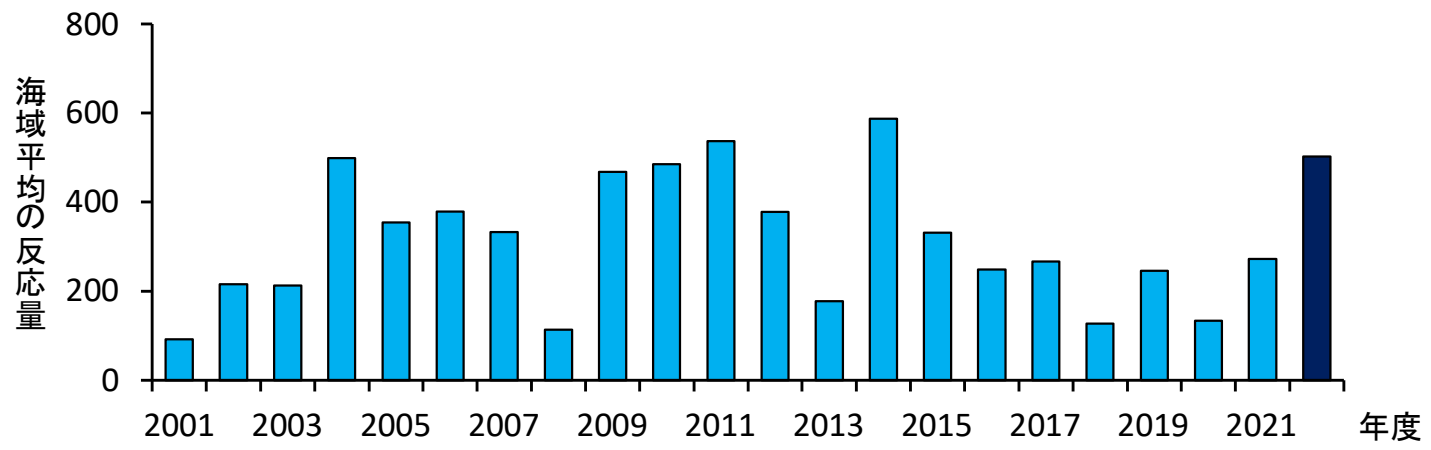


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

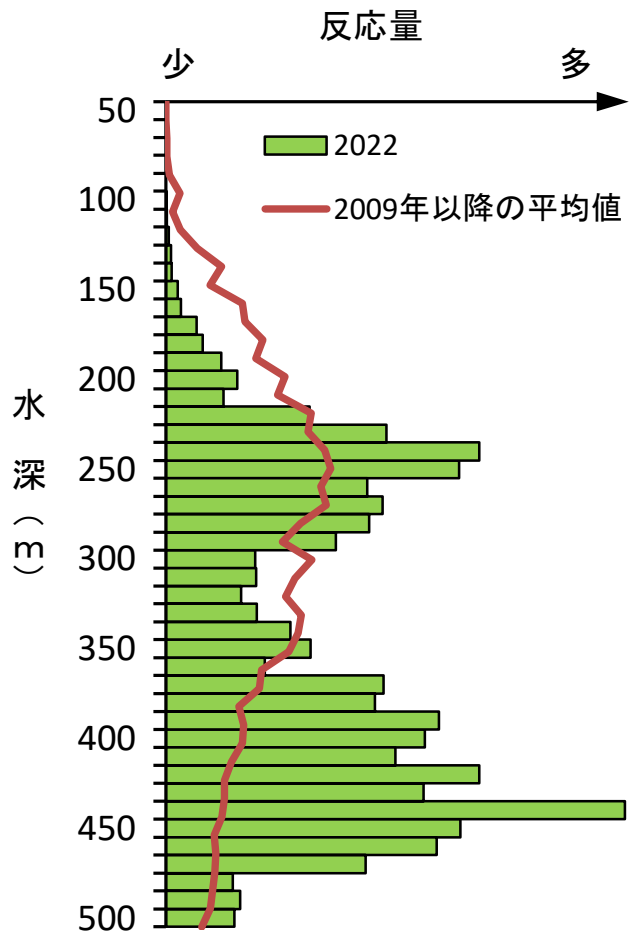


図4 水深別(10m間隔)の魚探反応量

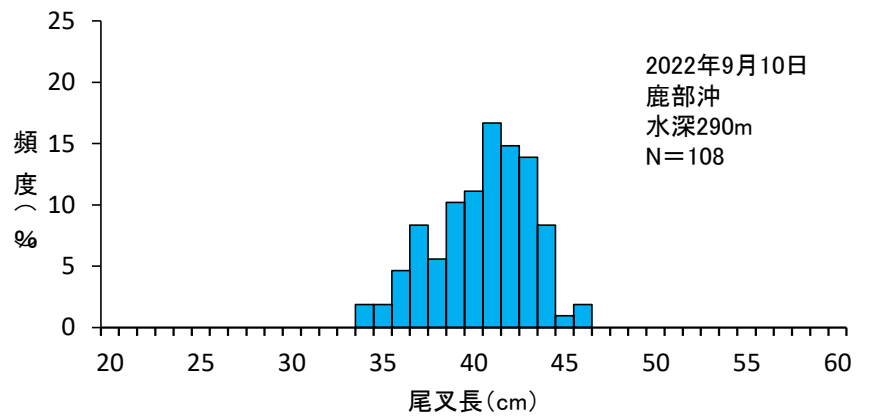
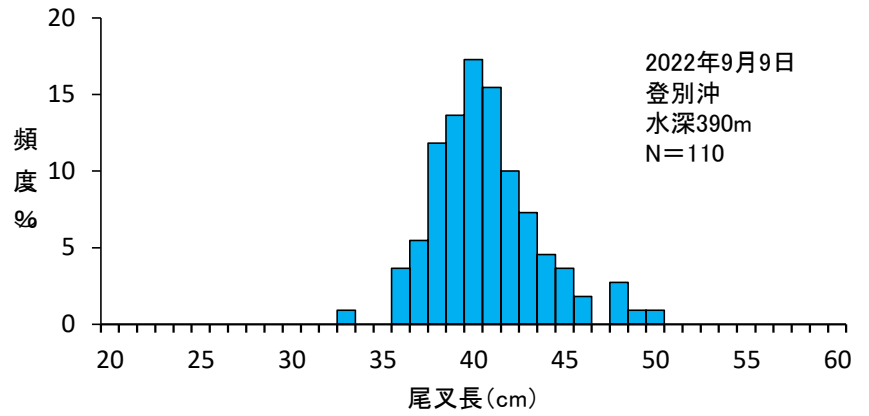


図5 漁獲物の体長組成

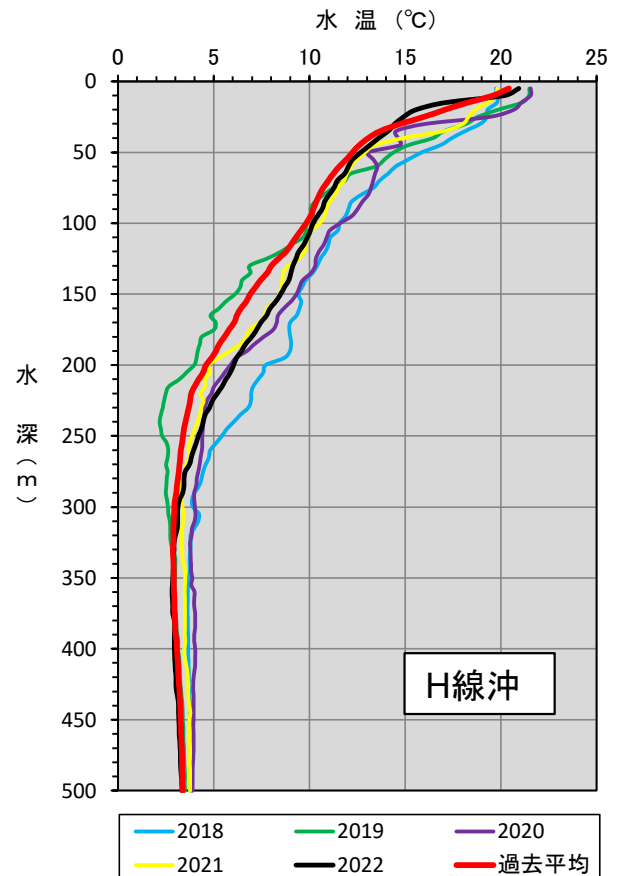
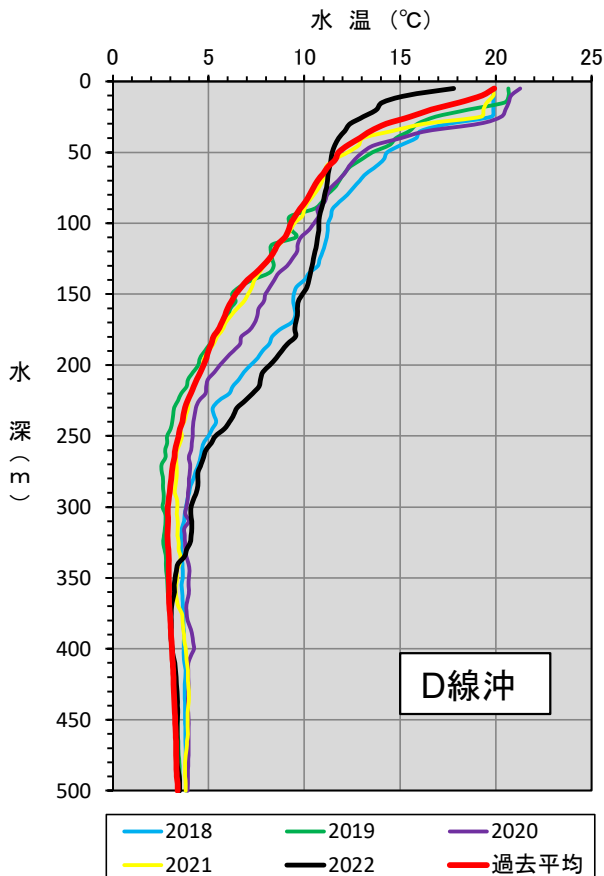


図6 8月下旬における水温の鉛直分布  
 左:南茅部沖(D線上), 右:登別沖(H線上)  
 (過去平均:本調査における2002~2021年度の各調査点の平均値)